

由来

この屋敷は、1867（慶応3）年に建てられた武家屋敷であり、約160年の歴史をもちます。

多度津藩6代目藩主京極高典（たかまさ）公は、多度津町内の家中（かちゅう）にある多度津陣屋の藩邸に住んでおりました。江戸時代の終わり頃、日本中が不穏（ふおん）な情勢の中、外国の軍艦の攻撃があった場合の避難場所として、地勢的に安全な奥白方の地に藩邸を建てようとした。

その藩邸の工事に先立ち、350石取りの国家老（くにがろう）であった林求馬（はやしもどめ）が、藩邸工事の陣頭指揮を執る場所として奥白方のこの地に家老屋敷を築いたのがこの林求馬邸です。

ところが、翌1868年に明治維新・文明開化の時代となり、攘夷運動も霧散したため多度津藩の陣屋移転計画も頓挫し、この家老屋敷だけがこの奥白方に残されたという訳です。

求馬の子、孫、曾孫と3代にわたって実際に住居として使用されてきており、山里の地にあるため、戦災にも遭わず、宅地開発の波にも洗われず、約160年を経ってもほぼ建築当時の姿を保ち、いわば「幕末のタイムカプセル」です。（多度津町指定有形文化財）

造りのあらし

1867（慶応3）年、広さ1,646㎡の敷地に白壁の塀で囲んだ入母屋造（いりもやづくり）の屋敷が建てられました。

広間・座敷・控の間などが、一つ一つ独立しないで互いに連絡されて建てられており、様式は書院造（しゅいんづくり）で、近世の武家屋敷を継承しています。

玄関の屋根は、数棟がかま型につながり、正面は入母屋造（いりもやづくり）で、全て瓦ぶきとなっています。その鬼瓦の背の高さが、棟の高さと同じで、一般商家の造りと異なっています。林家の家紋である“鷹羽の裏紋”が鬼瓦に刻まれています。

庭園は、北手の山々を借景として取り入れており、秋の入陽（いりひ）は格別素晴らしいものです。



邸宅



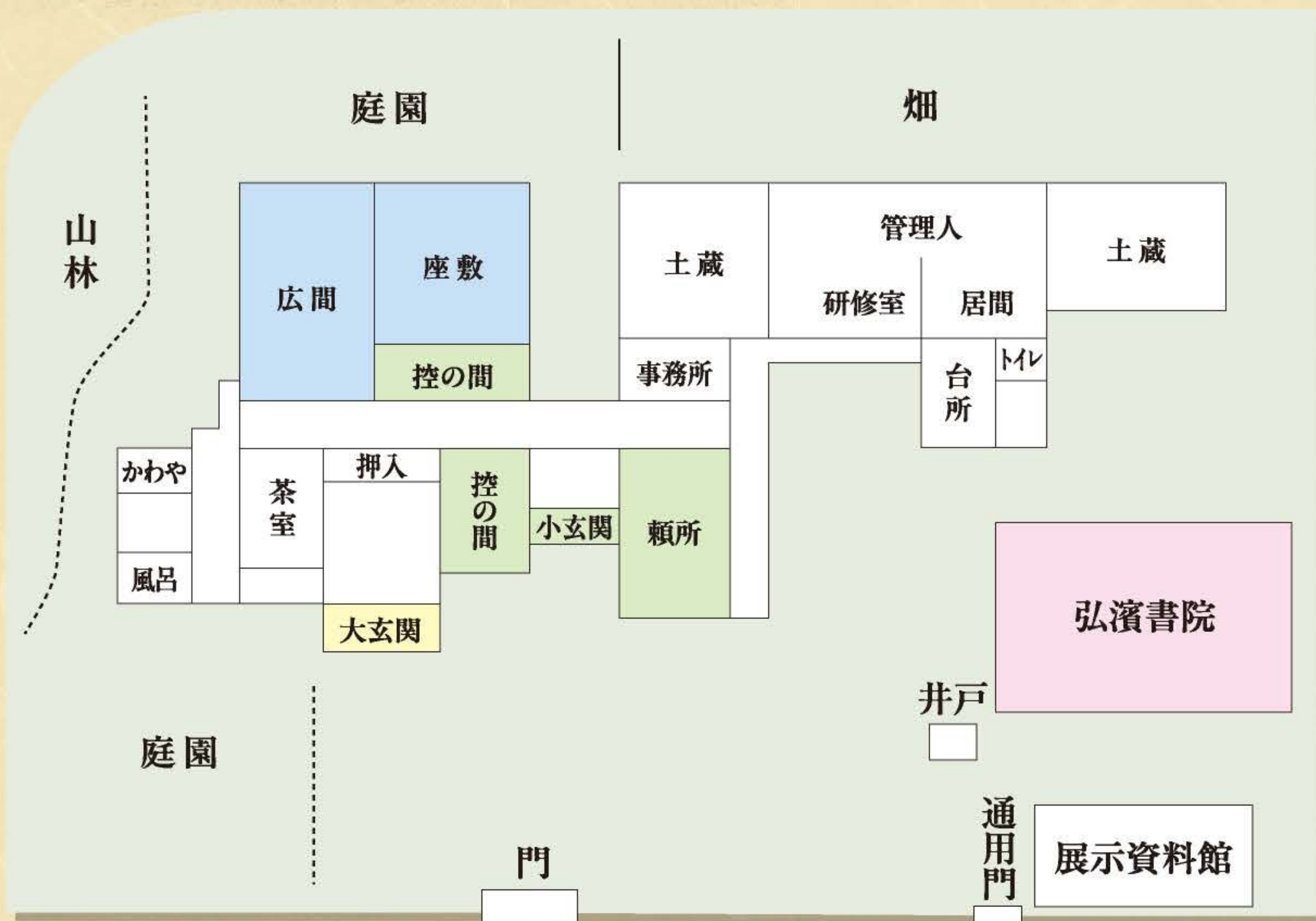
大玄関

「大玄関」は、殿さまが御成りのときの御用玄関として造られたもので、従者は向かって右側にある「小玄関」が使われていました。

広間・座敷

来客との対面や、会議を開くための部屋。各部屋の欄間（らんま）には透彫り（すかしぼり）がいてあり、天井は格天井（こうてんじょう）といい、太い木を井桁（いげた）状に組み、上に板を張ったもので、仏教寺院の影響があり、家老格に相応しいものです。

座敷の上段の間（左）の背後には床の間と違い棚を設け、右側の調台構え（ちょうだいぐまえ）と相対し、広縁（ひろえん）に向かって構えています。



弘濱書院



林求馬の叔父で、先代の多度津藩家老である林良斎は、1846（弘化3）年に多度津の堀江に私塾「弘濱書院（ひろはましゅいん）」を開き、藩士や一般子弟の教育に力を入れました。昭和61年に多度津文化財保存会が、この由緒ある建物を林求馬邸内に新築復元したものです。

林良斎は、大塩平八郎の私塾「洗心洞（せんしんどう）」で、大塩平八郎から教えを受けており、弘濱書院には、大塩平八郎や池田草庵などの多くの学者と林良斎との交流を示す資料などを展示しています。

控の間・小玄関・頼所



控の間は2つあり、一つは奥座敷に隣接した部屋。もう一つは大玄関の右にある部屋である。奥座敷に隣接した部屋では家来の武士が待機し、大玄関右にある部屋は、お側衆、家中、護衛の侍などが控えていた部屋だと推測されます。

- 小玄関…家来の武士や従者が出入りしたところ。
- 頼所（たのもしょ）…一般民衆の意見を聞くところ。

展示資料館

展示資料館は、なまこ壁の蔵造りの建物で、「年中行事図屏風」や谷文晁の「龍昇天の図」などの書画や林家ゆかりのものを展示しています。

